

市の中心部を流れる大河そして河畔の丘に聳える中世の城塞、故郷の古い城下町人吉を思わせる美しきバツサウ、そして4年半住みよの後の訪問回数が郷里人吉を越えるほど訪ねたエアランゲン、この二つの街は私の第二の故郷である。二人の娘も新婚旅行の機会にエアランゲンを訪れている。エアランゲンは娘たちにも思い出の地である。



パイエルンの民族衣装

# エッセイ

## 車窓雑記

佐藤 猛夫

### はじめに

学生時代、都立大学駅近くのアパートから通学していた私は東横線に何回くらい乗っただろうか。どこへ出かけるにしても先ずこれに乗るしかなかったから、千回いや二千回以上は乗ったかも。サラリーマンになって、あちこち引越しの末横浜のはずれに住むようになってからは、東海道線を毎朝毎晩飽きもせずに行ったり来たり、いや飽きてもいたけど半ば惰性で乗っていました。

ところでこの国に生まれ育って60年、ちようど還暦をむかえた年・・・今から10年余り前のことでしたが、未だに一度も乗ったことのない路線も随分あるんじゃないか、それならこの際日本全国の鉄道路線を隅から隅まで全部乗ってみよう、と思い立ったのです。

取りあえずは第三セクターだとか私鉄は除き、JRを全線乗って

みようかと決めたのです。

さて、世間には鉄道マニアといわれる方々が随分いるようで、撮り鉄、食べ鉄、乗り鉄などとジャンル別に分かれ、乗り鉄では、各種型式の車両をしらみつぶしに乗る人、愛称のついた特急や急行、更には最近売り出しの超豪華列車に乗ることを楽しみとする人、秘境駅や鉄道遺産巡りに精を出す人など細かく分類されるようですが、私は難しいことは一切抜きで、ただ車窓からのんびり景色を眺めることに徹しようと思決めました。

### 第一話

平成19年2月下旬、まず第一弾として南九州ローカル線の旅に出ました。

実は私は昭和が平成に移る頃の約5年間、鹿児島に赴任しておりました。当時、せっかく九州にきたのだからと、休暇を利用してあちこち回ったのですが、殆んど全て車で、JRにはあまり乗っていませんでした。

羽田から鹿児島空港まで飛行機、空港から枕崎まで高速バスに乗り、昼ごろ枕崎に着きました。鹿児島島着任当時の枕崎駅は、ここ

から薩摩半島の西側を北へ向かう私鉄、鹿児島交通の接続駅でもあったため、何本かの引込線や駅舎、倉庫もあったように記憶していますが、今はJR指宿枕崎線の一日数本の列車が発着する終着駅。新しく造られたホームがあるだけのこじんまりした駅になっていました。

枕崎から山川まで、晴天ならば車窓には常に開聞岳が見えるのですが、この日の鹿児島地方はあいにくの雨。雲が低く垂れこめ、開聞岳は全く姿を現しませんでした。開聞岳の東側の麓にある西大山駅は、周囲に人家もない畑の中の小さな無人駅です。但しホームに3メートル位の標柱が立つっており、白地に黒く「日本最南端の駅」と表示されており、開聞岳をバックにこれを写真に撮るために訪れるマニアも多いようです。

列車は指宿を過ぎると薩摩半島の東岸を北へ向かうようになり、右手には錦江湾と桜島が望めるのですが、雨でこれもだめでした。

翌朝、雨は上がり、宿泊したホテルからは錦江湾を隔てて眼前に美しい桜島の雄姿。

この旅の3年前九州新幹線が鹿

児島―新八代間で営業を開始し、地元の人が西駅と呼んで慣れ親しんできた西鹿児島駅は鹿児島中央駅に名称が変わりましたが、その鹿児島中央から新八代まで約40分ほど新幹線に乗りました。

新八代からは球磨川沿いを遡る肥薩線で人吉へ。人吉は球磨川の中流域に広がる盆地で、鎌倉時代以来七百年にわたり相良氏が治めた城下町。途中下車して30分ほど歩き、城址へ行ってみました。見下ろす球磨川は城の北側を川幅広く東から西へ流れ、その向こうに九州山地の山並みが続く明るい展望の地でした。

人吉から再び肥薩線に乗ると、列車はいよいよこのローカル線のハイライト「矢岳（やだけ）越え」にさしかかりました。ディーゼルカーはエンジンをふかし急勾配をゆっくり上っていきます。スイッチバック、ループ線、再びスイッチバックの連続するこの「矢岳越え」は日本三大車窓の一つと言われ、マニアの間では大変な人気のある区間です。左側の車窓からは眼下の加久藤（かくとう）盆地の向こうにえびの高原が広がり、その先には霧島連山が望め、または

るか遠くには桜島がかすんで見えました。

峠を越えた列車は間もなく鹿児島県に入り、つい先ほどまで唸り声をあげていたエンジン音は打って変わって、カタカターン、コトコトーン、カタカターン、コトコトーンと軽快な音を立てて緩斜面を南へどんどん下り、肥薩線の終点隼人駅に到着しました。ここからは鹿児島中央行の日豊本線に乗り換えました。この日豊本線、このあたりから鹿児島中央まで車窓左に桜島を眺めるようになりませんが、特に竜ヶ水駅あたりから錦江湾を隔てて間近に見る桜島は圧巻です。

三日目、この旅の最終日です。天気は昨日に続き晴。午前8時過ぎに市内の鴨池港からフェリーで約40分、桜島を左舷に仰ぐように見ながら錦江湾を横切り、対岸の垂水へ。垂水からは路線バスで約2時間かけ、ようやくJR日南線の始発駅志布志へ着きました。学生時代・・・旧国鉄の全盛期にあたりますが・・・当時は垂水から鹿屋を通り志布志まで古江線（後、国分―垂水間も開通して大隅線に改

称）という線があり、友人と初めて九州旅行をした時それに乗った記憶がありますが、同線は国鉄民営化に前後して廃線になりました。

さて、志布志駅も一昨日の枕崎駅と同様に駅舎はなく、駅員もいないこじんまりとした駅でした。日南線はその名称から明るい海岸沿いを海を眺めながら走る列車を想像しますが、実際はそうではなく、車窓から海が眺められるのは志布志からしばらくの間と、途中の大堂津から油津あたりの約10分、そして観光地の青島あたりだけで、それ以外は内陸の農業地帯を通ります。志布志から約2時間半で列車は南宮崎へ到着、ここから宮崎空港線に乗り換え5分ほどで宮崎空港へ到着、南九州ローカル線の旅は終了しました。空路羽田経由で帰宅しての私の最後の仕事は、鉄道白地図の今回乗った路線に赤線を入れることでした。（第一話 終り）

## 第二話

以前ラジオかテレビで「日本人は『三』という数字を好んで使います」と聞いたことがあります。

日本三景、日本三大名園、日本三大急流、三筆、三蹟、三大祭り、私がかつて勤務していた会社には、当社三大奇人と称された人達もいました。それはともかく、日本三大車窓は鉄道ファンならずとも知っている方も多いのではないかと思います。

その三つとは、狩勝峠（北海道）、姨捨（おばすて、長野県）、そして前回書いた矢岳越え（熊本県・宮崎県）です。

狩勝峠は根室本線が富良野から十勝、帯広方面へ向かうときに越える峠で、車窓からは雄大な十勝平野を一望することができます。根室本線最大の難所といわれ、SL時代には列車は前後に重連の機関車を配し、黒煙を上げて山腹を大きく迂回しながら上っていました。

撮り鉄の皆さんの絶好のポイントだったようです。

国鉄ではこの難所の改善のため新狩勝トンネルを开通させ、昭和41年に新ルートへの切り替えをして急勾配の緩和を図ったそうです。私は昭和39年に高校の修学旅行でここを通りましたから、切り替え前の旧ルートということに

なりませんが、夜行の急行列車だったと記憶しており、従って当時の車窓からの風景は見ておりません。

現在のルートでの車窓風景も、北海道の大自然を満喫するのは十分です。

二つ目の姨捨は、長野と松本を結ぶ篠ノ井線の姨捨駅からの風景です。眼下に棚田、その向こうに千曲川が流れ、善光寺平が広々と見渡せる展望の地です。

三つ目の矢岳越えは第一話でお話ししたとおりです。

ところで私はこの三大車窓にぜひもう一つ加えてほしい車窓風景があるのです。『三つ』にこだわらなければ一つ・・・姨捨あたりと入れ替えてもいいくらいに思っています。

それは、中央東線の下り列車が笹子トンネルに続く小さなトンネルを抜けるとすぐの、勝沼ぶどう郷駅付近からの甲府盆地の風景です。ホームのすぐそこから見渡すかぎりのぶどう畑が広がり、遠く甲府盆地の西のはてに甲斐駒ヶ岳、その手前には鳳凰三山（地藏岳、観音岳、薬師岳）、鳳凰三山の左奥には白根三山（北岳、間ノ岳、農鳥岳）と、三千米級の山々

が屏風を立てたように連なつて見えます。

なお、この車窓風景を見るなら四月、桜の咲く時期が最高です。ぶどうとともに有名な特産の桃の花が満開で、南アルプスの山々は残雪に輝き、さらにこの勝沼ぶどう郷駅はホームの端から端まで桜の並木になつて居るのです。

私は、この風景を眺めるだけのために、中央線に乗ったこともありました。（第二話 終り）

# 会員の

# ひろば

## 会員活動報告

### ●全国歴史研究会主催

「本都冬季研究発表会」での講演  
◇平成29年12月16日（土）、

五反田文化会館で左記2名の当  
会役員の方が講演されました。

○副会長 竹村紘一氏  
演題「仙石氏の興亡録」

○副会長 堀江洋之氏  
演題「水戸光圀の師」

●前橋市文化スポーツ観光部主催  
「第二回前橋藩主・松平大和守家  
顕彰祭」での講演

◇平成30年4月22日（日）、  
前橋市「臨江閣」（以前、当会  
のバス旅行で立ち寄った名所）  
で会員の長尾正和氏が講演。

演題「前橋藩・松平大和守家2  
50年」前橋市長、結城  
市長はじめ約160名が  
聴講。長尾氏ご尊父の本  
籍が会場の臨江閣エリア  
であることも判明。

## 受贈図書

会長 加藤 導男

全国各地の歴史研究団体より、  
会報等をご惠贈いただきました。  
紙上より厚くお礼申し上げます。  
（平成30年3月31日現在）

◇宮城県歴史研究会  
「歴研みやぎ」第103号

◇日立歴史研究会

「ひたち歴研」第34号

◇江戸の歴史研究会

「会報江戸」第153号

◇中国の歴史と文化を学ぶ会

「中文会ニュース」第60号

◇岡倉天心市民研究会

「天心報」第21号

◇静岡県歴史研究会

「会報」第151号

◇愛知歴史研究会

「あいち歴研会誌」第153号

◇しんあいち歴史研究会

「歴研会誌」第72号

◇大阪歴史懇談会

「会報」第402号

◇歴史懇談「第31号

◇兵庫歴史研究会

「歴研ひろば」第264号

◇岡山歴史研究会

「歴研おかやま」第21号

